

「わたしはぶどうの木」

(ヨハネ15:1~8)

挽地茂男

2020.4.26 日本基督教団千歳丘教会

神学校に勤めていた時代に教えた学生の牧師の就任式や按手式に呼ばれることが時々あります。なかでも非常に鮮明に記憶に残っている学生がおります。彼は韓国人で、大学生の時に日本で宣教するという幻を与えられます。彼は大学を卒業すると、教団や教会の支援も全くないまま、日本にやってきました。そして日本語学校に通い始めます。就労ビザがありませんから、それに抵触しない程度のアルバイトをしながら2年間日本語学校に通います。その間、日本で属した教会が、彼の志を理解し全面的に支え始めます。そして教会は、彼が神学校に学びの訓練を受けて、牧師として教会に仕える道が



ひられるように、さまざまな配慮と支援を始めたのです。

しかし簡単には、道が開けませんでした。学生ビザが下りなかったのです。彼が最初に行こうとした神学校は京都にある神学校でした。その神学校は学校法人ではなかったため、学生ビザが下りなかったのです。結局さらに一年間を棒に振り、その一年間は観光ビザで、韓国と日本を往復して、ビザをつなぎながら一年間を



過ごして、合計3年を経て、学校法人である私の勤めていました神学校に入学してまいりました。入学してまいりましたが、しかし、まだビザは間に合っていなかったのです。それで、正規の学生ではなく、特別聴講生という形で、とにかく学校に受け入れ、その間にビザの問題を解決していくことになりました。それでも正規の学生になるためにさらに一年を要したのです。

性格が非常におおらかな人なので、まったく周囲にも苦勞という感じを与えない学生だったのですが、おそらく心勞は並大抵ではなかったでしょう。いずれにしろ、教会は

ほんとうに実によく彼を支えたと思います。今はとても評判のいい、教会によく仕える牧師に成長しています。神学生や牧師は、教会に育てられるという側面があるのです。そしてそのような教会が、彼や彼女の中の教会像として一つの方向性を与えていくことも確かなのです。

さて本日の聖書箇所は、わたしたちが信仰者として成長するための原則を教えてください。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」(5節)という有名な言葉が出てきます。まず前半をもう一度読んでみます。1-4節。

15:1「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。15:2 わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。15:3 わたし



燃える柴の中から神は語られた「エゴー・エイミ」

の話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。15:4 わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。

ここには、以前に学びました、ヨハネ福音書に特徴的な表現、「わたしは…である」とイエス・キリストが自分のことを説明するいわゆる「わたくし言葉」が出てまいります。この「わたくし言葉」はヨハネ福音書には七つ出てまいります。今日の言葉はその七番目のものです。このこともすでにお話しましたが、「わたしは…である」という表現はギリシャ語では、〈エゴー・エイミ〉という言葉で、英語では“*I am*”（わたしは…だ／わたしはある）と訳されます〔エゴーが“*I*”でエイミが“*am*”〕。聖書では神様がご自分を顕すとき〔顕現するとき〕のお決まりの言葉、定まった表現形式、神の顕現定式として知られている表現です。出エジプト記3章14節のモーセに神さまが自分顕す(自己顕現)の記事を読ん



でみますと、神はモーセに、「わたしはある(エゴー・エイミ)。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある(エゴー・エイミ)』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」この「わたしはある」という表現が、70人訳ギリシア語訳旧約聖書で「エゴー・エイミ」とギリシア語に翻訳され、結果として新約聖書の重要な表現の一つとして定着します。

この「わたしはある」という表現は二つのことを意味しています。一つは、①「わたしはある」というのは、わたし(神)は「ある」ものの、存在そのものだということです。つまり存在をささえているもの(Ground of Being)、ありとしあらゆるすべてのものを「存在させるもの」という意味です。二つは、②「わたしはある」ということは「共にあるもの」「共にいるもの」つまり「インマヌエル」共

にいる神を意味しています。さきほどの出エジプト記3章を7節から端折りながら14節まで読みますと次のようになります。「わたしはエジプトにいるわたしの民の苦悩を確かに見た……。さあ、わたしはお前(モーセ)をファラオに遣わし、お前にわたしの民であるイスラエルの子らをエジプトから連れ出させよう……。わたしはお前と共にいる……。『わたしは、在って在るもの』である」(口語訳をベースに私訳)。

新約聖書ではこの神の顕現定式がイエスに適用されます。たとえば「湖上歩行」の物語(マルコ6:50 || マタ14:27 || ヨハ6:20)では、ガリラヤ湖の水の上を歩いてきたイエスを幽霊と間違えておびえている弟子たちに対してこの顕現定式が語られます。マルコ福音書ではこのように記されます。



マコ 6:50 皆はイエスを見ておびえたのである。しかし、イエスはすぐ彼らと話し始めて、「安心なさい。わたしだ(エゴー・エイミ)。恐れることはない」と言われた。

また終末時の偽キリストの出現を預言した箇所(マルコ13:6 || マタ24:5 || ルカ21:8)では、こう書かれています。やはりマルコ福音書を見てみると、マコ13:6 わたし〔キリスト〕の名を名乗る者が大勢現れ、『わたしだ(エゴー・エイミ)』と言って、多くの人を惑わすだろう。

そして受難物語の大祭司の「お前はほむべき方(神)の子、キリストなのか」という審問に対するイエスの返答(マルコ14:62 || ルカ22:70)にもこの表現が現れます。マコ14:62 イエスは言われた。「そうです(エゴー・エイミ)。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、／天の雲に囲まれて来るのを見る。」

またルカ福音書の弟子たちへの弟子たちへの復活顕現(ルカ24:39)においても、ルカ24:39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ(エゴー・エイミ)。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もな

いが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。

以上のように、これらは「わたしはある」「わたしがそれだ」「そうです」「わたしだ」と訳されているように〈エゴー・エイミ〉のあとに補語をとって「わたしは…である」とならない絶対的な用法です。これを「旧約的・伝統的顕現定式」と呼んでおきたいと思います。

ルドルフ・オットーは、最初に申し上げた出エジプト記に記されたモーセに対する神顕現の記事から、イスラエル宗教の神概念を、神の圧倒的な実在感から形成された特徴的な概念として取り上げ、その



理論的展開として宗教学の古典と呼ばれる名著『聖なるもの』(R. Otto, *Das Heilige*, 1917)を著しました。その著書の中で彼は、神

を「聖なるもの」と呼び、その「聖なるもの」との出会いを経験した人間の心的反応から、「聖なるもの」の性格づけを試みます。それによると、「聖なるもの(ヌミノーズ)」とは、相反する二重性を有しており、(モーセの神体験に見られ

るように)「戦操すべきもの」「おそれるべきもの」と同時に、人を「魅(了)するもの」「人の心を惹きつけるもの」として立ち現れる、と述べます。出エジプト記の「在って在る者」は存在そのものであり、



すべての存在の根拠であり、その意味で全てであります。人が「聖なるもの」に直面したとき、この全に対して無という自己感情が生じると言います。その感情をオットーは「被造者感情」と呼びます。マタイ福音書の山上の説教の冒頭で「心の貧しい人は幸いです」というときの「貧しさ」とは自分を越えた大いなる方、本当に豊かな神の前にいる自分を意識した「被造者感情」に満たされた人間の言葉なのです。

主イエスの〈エゴ・エイミ〉という顕現定式は、主イエスの表された神のもう一つの側面、つまりわれわれの日常生活に深く関わってくる受肉者としての側面を表しています。そこには人間の理性から隔絶していて橋のかけようもない超越神として、自然や人間との質的差異をもった「絶対に他なるも

の」(絶対他者)としての神の性質と共に、人間生活に親しくかわってくる受肉者の性質が同時に表されています。ヨハネの神の顕現定式がもたらすのは、このような宗教体験における恐怖感であり魅惑感なのです。

ヨハネ福音書においてはこの〈エゴ・エイミ〉という顕現定式が31例確認することができますが、それらの中にも今見たのと同じように、「わたしはある」「わたしがそれだ」「そうです」「わたしだ」と訳される絶対的な用法、つまり「旧約的・伝統的顕現定式」が出てきます(4:26, 6:20, 8:24, 28, 58, 9:9, 13:19, 18:5, 6, 8)。これらの表現は、元来、絶対的実在者としての神を指す表現ですが、共観福音書で見たようにこれらの表現がイエスに適用されています。たとえば、8:28 そこで、イエスは言われた。「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある(エゴ・エイミ)』ということ、〔また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していること〕が分かるだろう。

また別の箇所では次のように使

われます。ユダヤ人達に向かって、
8：58 イエスは言われた。「はっ
きり言っておく。アブラハムが生ま
れる前から、『わたしはある(エゴ
ー・エイミ)』。」

一方、このようなイエスの**絶対
的実在者、神
的性格**を宣言す
る定式の使い方
とは違う、ヨハ
ネ福音書独特
の使い方が出
てきます。この



エル・グレコ「福音書記者ヨハネ」

用法はすべて、〈エゴー・エイミ〉
という表現のもつイエスの神的絶
対性を背景に持ちながら、〈エゴ
ー・エイミ〉のあとに補語を導入す
ることによって、「**わたしは…である**」
という拡張表現になっています。福
音書記者ヨハネは言語的道具とし
ての隠喩（P.リクール）を巧みに
使いながら、イエスの持つ神的な
特徴とは逆の人となった神、**受肉
者としての諸特徴を象徴的に語る**
のです。こうしてヨハネは、隠喩を
使うことによって聞き手／読者をイ
エスにつて、さらには神について新
しいに認識・理解に導いているの
です。この表現は全部で7つ出てき
ます。

- (1) 6：35 **わたしは命のパンで
ある**〔赤字部分が**エゴー・エイミ**〕
- (2) 8：12 **わたしは世の光である**
- (3) 10：7 **わたしは羊の門である**
- (4) 10：11 **わたしは良い羊飼いで
ある**
- (5) 11：25 **わたしは復活であり、
命である**
- (6) 14：6 **わたしは道であり、真
理であり、命である**
- (7) 15：1 **わたしは真のぶどうの
木…である**

ヨハネ福音書における顕現定式
〈エゴー・エイミ〉は絶対的な実在
者・超越者としての神であるイエ
ス・キリストの性格を示すとともに、
人間の理解に開かれた神として、
相対化された絶対者としての受
肉者の性質を示しています。

聖書が宣言する「インマヌエル」
なる神とは、まさにこの「相対化さ
れた絶対者」としての神を指して
いるのです。受肉に見られる絶対
神の相対化を「愛」という名に置
き換えることができます。「愛」と
は現状に対して不断の自己存在の
相対化を要請する行為だからです。



主イエスの言葉はぶどうの木と枝と農夫である父を登場させます。



15:1 「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。15:2 わたしにつながっ

ていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。ぶどうの木と枝と農夫は、ぶどうの結実に不可欠な三つの要素であります。この三要素のつながりは、**信仰共同体の相互のつながり**を表しています。

ぶどうの木は、旧約聖書においては、しばしばイスラエルの民をたとえる表象として用いられます(詩80:9-15, イザ5:1-7, 27:2-6, エレ2:21, エゼ15:1-6, 17:1-6, 19:10-14, ホセ10:1 etc.)。詩編にはこう記されています。詩80:9 あなた〔神〕はぶどうの木をエジプトから移し／多くの民を追い出して、これを植えられました。エジプトから神の絶大なる恵みによって、引き出され、カナンに定住の地を与えられたイスラエルも、やがて、悪

しき実を实らせる偽りのぶどうの木になってしまいました。「わたしは真のぶどうの木」という主イエスの言葉は、このイスラエルに対しています。つまり**イスラエルの民であるという血族関係が救いの資格**のではなく、**主イエスにつながっていること、主イエスとの人格的関係こそが救いの根拠**だとされているのです。

ぶどうの木と枝という関係は、両者の生命的な関係を示しています。「神の民」とは主イエスにつながって生きる生命共同体のことなのです。そしてぶどうの木が良い実を实らせるために必要なのは、枝の剪定であり、念入りな準備であります。ぶどうの若枝は植えられ



てから3年間は収穫をせず、徹底的に刈り込まれると言います。



その間、生命を蓄え、良い結実をもたらす準備をするので

す。2節の「**手入れをする**」という言葉は、〈カサイロー〉という言葉

ですが、「刈り込む」という意味と同時に「清くする」という意味があります。次の3節「清くなる」なるという表現は、この関連で読まれなければなりません。ヨハネはここで〈カサイロー〉という動詞を使用することによって、農業に關係する農事的事実と神学的真理を同時に表現しているのです。イエス・キリストは「わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清く（カサイイ）なっている」（v.3）と語りますが、この表現は、「清さ」というものが、人間に内在する性格の一部なのではなく、神との結びつきによって獲得されるものであることを伝えているのです。「清さ」は自分自身の中から出てくるのではなく、「清い」方とつながっていることにゆえに担保されるという、「清さ」の關係的側面（cf. 13 : 10b）を表しています。清さとは、イエス様との（そして神との）結びつきによって決定されるものだからです。神／主イエスの言葉を信頼をもって受け入れることは、神／主イエスとの關係に入ることです。つまり言葉は關係を造るのです。ですから神がなさる「刈り込み」とは、主イエスの言葉によっ

てがなされる關係の作り変え、と言い換えてもよいのです。そして最終的にイエス様は、私たちをご自分の命を捨てるに値する「友」と呼ばれるのです。

4節の「わたしにつながっていないさい」は、端的にその關係を表現する言葉です。その關係を表わす〈メノー〉というギリシャ語は、「つながる」「とどまる」「…にある」「宿る」等の意味を持ちますが、新約聖書に約120回登場するうち、ヨハネ福音書に41回現れています。なんと3分の1がヨハネ福音書に現れているのです。この言葉がヨハネ福音書を理解するキー・ワードであることがわかります。本日の箇所の後半部5－8節はこの動詞〈メノー〉を中心に構成されています。そして、この動詞によって表現されるぶどうの枝とぶどうの木の「つながり」のもたらす結果が二つ確認されます。第一は ①つながっていること、つまり生命の根源との結合を持っていることによって、結実



が期待できるということです。ですから逆に、つながっていないこと、つまり生命の根源から分離されているものが枯渇し、廃棄されるという方向をたどるのは当然のことなのです。信仰は自分以外の誰にも代理ができなきわめて個人的で、主体的な決断を必要とする行為である、と同時に、信仰者は全面的に神に依存する存在であり、ぶどうの木と枝との関係では、決して「独り立ちすることのできない枝」であり、ぶどうの木を通して与えられる生命力、樹液によって生命を保ち、伸びもするし、実を实らすこともできるのです。枝には自発的生命力があるのではなく、ぶどうの木を通して樹液に満たされるとき、枝は茂り、花を咲かせ、実を实らせるのであります。

「いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる」農夫である父（なる神）は、実り多い枝となるために、ぶどうの枝の特性に合わせて剪定なさいます。神はそれぞれの「キリスト者」たちの特性に従って、実を結ぶための作業をなさるのです。最初の弟子たちはガリラヤ出身のさほど教養の高くない人々でありました。彼らが、さまざま

まな失敗を経験しつつも、神の言葉によって剪定されて、イエス・キリストの真の弟子となった時、豊かに実を結んで、神に栄光を帰する者たちに変えられたのであります。

「あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる」（v. 8）と、書かれているとおりです。

「つながり」のもたらす第二の結果は②望むものを願えば、かなえられるということです。（枝の持つ）願望自体が根源的な（ぶどうの木の持つ）願望と一体化するとき、その願いが成就されていくことは、むしろ必然です。

15:7 あなたがたがわたしにつながって（メノー）おり、わたしの言葉があなたがたの内にいつもある（メノー）ならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。



ここでは言葉は、知的な情報の伝達媒体以上のもの、つまり関係そのものです。主の言葉うちにとどまるとき、その願いが主の願いと重なり合うのは、むしろ当然だということになります。そして願いが豊かな実りとして結実し、その実りがキリストの弟子であることの証となり、実りをもたらした父なる神がたたえられることになります。農夫はその収穫によって讃えられるのが当然だからです。

わたしたちもまた、主のみ言葉を生きる者になりたいと思います。新しい1週間の歩みのために祈りましょう。

2020.4.26 日本基督教団千歳丘教会

